
パッション・サマー

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パッション・サマー

【Nコード】

N2567C

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

「春一番」に続く短編集第二弾。前作と同じく明るいものから暗いものまでオールキャラで書く予定です。

1、**ああ雑草エクストラ ブラックインパクト（前書き）**

黒の組織に理想や夢を持っていらっしゃる方は遠慮したほうがいい
かもしれません（笑）

1、ああ雑草エクストラ ブラックインパクト

久しぶりに相方の部屋を訪ねてみたら、床半分に敷き詰められた「それ」が

目に飛び込んできた。

「ちょっとコロン！一体何なのさこれは！？」

「……この前通りすがりの男に貰った」

室内なのに青々しく賑わう1mほどの草がふあっさりと生えている。

どっさりでももっさりでもない。

ふあっさりだ。

頭が痛くなるのを感じながらキャンティはもう一回叫んだ。

「どこの道の通りすがりが麻薬をあげるっっーのさあああああ！
！！！！」

ああ雑草 今度はついに 麻薬です (キャンティ心の川柳)

そう。

コルンの部屋には麻薬の原料にもなるケシが大量に生えていた。

通りすがりの人に「あら、お花きれいですね」「それなら一本差し上げましょう」とか

会話を交わしてもらえるような軽い草ではない。

高額のお金で取引される所謂「悪の華」だ。

「……これを育てて他の人にもあげるなら、タダであげるって言われた」

「んなもん育てんな！」

よくよく聞いてみると、とある裏社会の人間が集まる裏町で歩いていたら

上記のような条件でケシの種子を貰ったらしい。

タダであげて、貰った相手が広めてくれれば、常習性のあるそれを再び求めて

自分の下へ来て今度は法外な価格で売りつける算段だったのだろう。よくある犯罪である。

そんなこんなで2人がぎゃいぎゃいと（主にキャンティが）騒いでいると、

その声を聞きつけてジンとウォッカも部屋にやって来た。

案外アットホームな組織だ。

眉間にしわを寄せてジンが問いたです。

「何の騒ぎだ、キャンティ」

「どうもこうもないよ！このバカがケシを見知らぬ男から貰ってきて部屋で育ててたんだよ！！」

「いや、俺らの組織って一応ワルなんだし、お前等もスナイパーなんだから

そこは別に……」

「甘いね！」

ウォッカの相変わらず弱いツツコミにバン、と壁を叩くキャンティ。

「スナイパーは健康が一番なんだよ！」

麻薬に頼るような腕のスナイパーはプロじゃないのさ！

早寝早起き1日3食10キロの早朝マラソン！！

ついでに夜食はラーメン禁止！！

これを毎日繰返すのが本物のスナイパーっつーもんだよ！！！！」

何だかえらくヘルシーな暗殺者である。

その健全なポリシーを貫く悪の構成員の熱弁にウォッカは

「お、お疲れっす……」と返すしかなかった。

元凶のコルンは「使うつもりは無いのに……育てるだけなのに……」とぼそぼそ訴えるがあまりにも小さい声なので気付かない。ふう、とジンがため息を一つつく。

「APTXを作っている我々がとやかく言うことじゃねえが、キャンティの意見も否定はできねえ。コルン、それは捨てろ」

「……えー…」

「えー、じゃない!」

お父さんのような言い聞かせ方をする黒の組織幹部ジン。

駄々をこねるコルンを目にして父性が顔を覗かせたらしい。

「せっかくここまで育てたのにもったいない」といじいじしょげ返る駄々っ子と

「お前が使わなくても育ったケシを他の奴が使えばややこしくなると叱るお父さん。

そんな彼らを背にして、今度は一際甲高い声が後ろから投げかけられた。

「Hey, コルン! それなら私がもらってあげてもいいわよ!」

突如現れたのは上階の自室でビリーズブートキャンプ実践中だったはずのベルモット。

またややこしいのが来た…、とジンが思ったのは内緒である。

そんなことは露知らず、彼女は壁にもたれかけ無意味に髪を掻き揚げ無駄に妖艶な笑みを部屋の4人へと向けた。

「私がもらうならもったいなくはないでしょ? ちゃんと責任もって最後まで育ててあげるわよ」

「育ててどうすんのさ」

「それはやっぱあれじゃないか？老化からくる腰痛とか手足の痺れとかに……」

「お黙りグラサン！！」

凶星だったらしい。

ケシの花からできるモルヒネは医薬品として強い疼痛を緩和する効用があるのだ。

アポトキシンで外見は若返ったが中身は悲しいかな、若干お年を召したお婆さんのままのようだ。

「ベルモットにあげるのは嫌……」

「あの女にあげるのはアタイも気に食わないね。かと言ってあんたも持ってたらダメだよ！」

「いや、ここはやはり年長を敬ってベルモットの意見を尊重したほうがいいが」

「年長は余計よ！！」

四者四様の意見がわらわらわら……

ぶちっと縄が切れるような音がしたのはそんな時。

「……どうやら、俺直々に手を下すほか無いようだな」

切れる音を出したジンがいつの間にか手に持ってたのは――

「ちょ、兄貴待ってください!!」

火炎放射器はまずいっすよここ地下っすよ逃げられないっすよ!!」

「てかアンタだって逃げられないよ!」

「……皆で、無理心中」

「ちょっとコルン、変な台詞言わないでよ! ジンもそれ置きなさい!!」

「うるせええ!! 黒の組織が草捨てる云々で必死になるなど情けないにも程があるわああああああ!!!!」

その後本当に火炎放射器が火を噴いたかどうかはわからないが、それ以降コルンが知らない人から物を貰う時はジンにお伺いを立てるようになったのは事実である。

1、ああ雑草エクストラ ブラックインパクト（後書き）

相変わらず「雑草」はしょーもなさを目指してます（死）
あと麻薬はだめですよ。と一応注意書きを。（笑）

2、適齢期

「あ、高木刑事！」

非番の昼、牛乳を切らしてすることに気付いて近くのスーパーに行き入ろうとすると見慣れた少女がその店から出てきた。

「やあ、歩美ちゃん。一人でおつかい？」

「ううん。お母さんが今レジでお金出してるところ。人がいっぱいだったからお外に出たくなったの」

「あー、この時間はよく混むからね。ちゃんとお母さんには外に出ること言った？」

「うん！ここのガチャガチャで待ってるって言ったよ」

指差す方向には仮面ヤイバーのガチャポンがずらり。

スーパーの入り口付近でよく見る玩具だ。

ドア前につっ立っているのは迷惑なので、その玩具の前に2人とも移動した。

「高木刑事もおつかい？」

「そうだよ。牛乳を買いにね」

だが、この自動ドア越しに見える混みようだとか向かいのコンビニへ行ったほうが

早いかもしれないなど心の中で苦笑する。

牛乳一本だけのために並ぶには少しばかり長い列が出来ていた。

そして再び少女に目を向けると、じっとこちらを見上げていたことに気付く。

膝を曲げ、屈んで視線を合わせた。

「僕の顔に何かついてる？」

「そういうわけじゃないんだけど……ねえ、高木刑事っていくつ？」

「へっ？に、26だけど？」

突飛な質問に思わず間の抜けた声が出たが、別に隠すことでもないので正直に言う。

実年齢よりも若く見られることはよくあれど去年から遂に20代後半突入である。

一方少女はその答えにふむ、と考え込む仕草を見せる。

その姿に、何だか取調べを受けているようだないつもの探偵団の行動を思い出した。

小学生とは思えぬ思考をこの子供達はよく披露するのだ。

次に小さな探偵は再び顔を上げる。

「じゃあ佐藤刑事は？」

「え、佐藤さん？佐藤さんは28歳のはずだよ」

4月で誕生日を迎えてる。

なぜここで彼女の名前が出てくるのか皆目わからず
自分の頭にはてなマークがぼんぼんと浮かび回った。

自分や彼女の年齢に一体何の疑問が？と現役刑事は真面目に考えたが
一向に予測すら見出せず。

逆にその脈絡の無い質問を投げた少女は、両手を顔の前でぱんとつき
その回答に声を弾ませた。

「じゃあ、佐藤刑事は私のお母さんと同じ年なんだ！」

一瞬。

息が止まった。

いきなり後ろから肩を叩かれるような驚きと言うべきか。

なぜかはわからない。

ただ一瞬本当に息が止まった。

「前からね、ずっと思ってたの。私のお母さんとお父さんとね、
高木刑事や佐藤刑事は年がおんなじくらいじゃないかなあって」

おそろいだねー！、とどこか嬉しそうに笑う。

こういうときに「おそろい」という言葉を使うのは少し違うような

気もするが

幼い子供にとって他の人と共通点を見つけることはやたら嬉しいものらしい。

何の意図も全く無い無邪気な笑顔に、思わぬ己の内心の反応に戸惑いながらも

「そうだね」と同じく笑顔で返す。

すると少女の後ろ、つまり店のドアが開いて綺麗な女性が出てきた。真っ直ぐな背筋が「彼女」と似ている。

「あら歩美。その方は？」

「あ、お母さん！」

このすらりとした女性が少女の母親のようだ。

夏らしく薄いクリーム色のワンピースを着ている。

その綺麗な線を描く眉をひそめてこちらを見ている。

自分の娘が知らない男の人と話しているのである。

このご時勢だ。

普通は何用かと疑うだろう。

慌てて屈んでいた姿勢を正して挨拶しようとしたが、それよりも娘のほうが早かった。

「このお兄さんが”高木刑事”だよ！」

「あら！この方がいつも歩美がお世話になってるあの”高木さん”？」

”高木”という言葉でころっと表情が変わる。
目を輝かせてにこやかに歩み寄ってきた。

「いつもいつも娘がお世話になってるようで……あ、私吉田歩美の母です」

「いえいえ、こちらこそ。高木涉と申します」

仕事柄角度のついたお辞儀をする。

対する女性も「探偵気取りで刑事さんたちにご迷惑をかけ、もう何と申していいのやら……」とぺこぺこする。

一体家でどんな風に自分のことを話したのかは予想できなかったが、とりあえず良い風には言ってもらってるらしいと人知れず安堵する。娘の頭に手を乗せて一緒にお辞儀させようとする姿は

先ほどの言葉通り自分の恋人と同じ年の若さが滲み出る。

しかし、その若さと同時に「母親」というオーラも垣間見えた。

自分とでも2歳しか違わない目の前の女性は、違う世界にいるのだろうか

何となく思う。

「探偵気取りじゃないもん。探偵だよ！」

「こら、歩美」

「まあまあ、こちらも助けてもらうことは実際あるので……」

その後主婦と刑事によるお辞儀の応酬を暫くして、一通り会話を終えてから親子と別れた。

ばいばーいと手を振る少女。

母親はもう一回お辞儀をした。

そして背を向けて親子手を繋いで帰っていく姿を、暫く見送る。親子の背に、息が止まった瞬間を思い返された。

——じゃあ、佐藤刑事は私のお母さんと同年なんだ！

そう、自分達の年齢で小学生の子供を持つ親がいるのだ。

小学生はまだ若干早いとは言え、幼稚園児くらいの子供なら既にいる同級生もそろそろ出始めた。

適齢期。

まさに今がそれなのかもしれない。

自分も、自分の恋人も。

別にそれで焦ることは無いし、互いのペースでゆっくり時間をかけて進んでいけばいいと思ってる。

これは彼女だって同じ気持ちだろう。

むしろ自分よりゆっくりかもしれない。

ただそれでも、今言われた言葉は改めて己に気付かせた。

親になってもおかしくない大の大人だと。

そういった話が出てくることは少ない職場ということもあり

情けないながら考えの及ばない事実だった。
自覚したところでどうすることもできないけれど。

「……参ったな」

誰に言うわけでもなく、ぽつりと呟く。

何に対しての困惑なのかは自分でもわからない。
もう親子の姿は既に消えてきた。

ふっと脳裏に恋人の姿がよぎる。

この事実を言ってみたらどんな顔をするだろう。

いまいちぴんとこない顔つきでこちらを見てきそうな気はするが
それでも聞いてみたい気がした。

2、適齢期（後書き）

7月7日は高木刑事の初登場日らしいです。

3、花の下の子

まずは髪を柘植の櫛でとかす。

そして髪を後頭部に一気に上げる。

口にくわえてたりボンを右手で取って一重、二重にくるくる縛る。

そのまま一定の位置に固定された髪を残ったりボンの長さで蝶々結び。

「……上手いことできるもんやなあ」

「そう？」

和葉のポニーテールが出来るまでを眺めながらしみじみと平次が呟く。

昔からこの髪型をメインにしていた彼女は流れるような仕草で後れ毛をピンで留めている。

ここは服部家の居間。

夕飯にてっちりを作るということで、お呼ばれされた和葉が

待ってる間に合気道部の練習のせいで少し崩れた髪形を直していたのだ。

何もすることが無い平次はその様子を見ていたのだが。

鏡も無しに、目が後ろにでもあるかのような器用さで一つの作品が出来上がるその様は

男の平次にとって真新しい世界だった。

「もうこの髪型とも十数年の付き合いやしなあ。そら慣れるて」

「そういうもんか」

「そういうもんや。平次のおばちゃんかてあの綺麗な髪形毎日素早く作ってるやろ？」

最後のピンをうなじ辺りにすっと差し入れる。

いつもの和葉の出来上がりだ。

「長い髪をようそんなに器用に扱えるもんやねんな。他の事やとどんくさいのに」

「最後の言葉はよ・け・い！」

じろりとにらんだ彼女を乾いた笑いで受け流した平次は机についてた肘を

離して胡坐をかく膝に手を置く。

彼女も頬を膨らましながらも前に置かれた茶に手を伸ばす。

ずずつと煎茶を飲むごとに頭のとっぺんに「くつついた」ポニーテールが

静かに揺れた。

その動く物体をぼんやりと彼は眺める。

彼女のそれは頭とつながってると言うよりその部分だけ違う物がくつついてる感じだ。

以前「ホンマに繋がってるんやろか」と思って引っ張ったら思い切り頬をしばかれたことを思い出す。

周りの人間に言わせれば「お前はアホか」な行動である。

そんなことを彼が考えてる間に彼女がことり、と茶碗を茶たくに戻すと

またそれが揺れた。

今度は開いたふすまから入り込んだ薫風も伴ってさらりと左に流れる。

その動きに、何かの記憶が重なった。

「他の……」

「ん、何？」

「他の、髪型はせえへんのか？」

「へ？」

「……あ」

ぼんやりしていたら勝手に思ってもみなかった言葉が口から出て自分でも驚く。

左右に静かに揺れる髪を見ている内に、催眠術にでもかかったかのような。

一方の和葉は突然の質問に一瞬怪訝そうな顔をしたが次に「他の髪型なあ……」と顎に手をあて考え込んだ。

「別にせえへんわけやないけど、何となくこれが一番落ち着くねん。それとも平次は他にやってほしい髪型でもあるんか？」

机を挟んで向かい側に正座する和葉は少し目を輝かせて平次に問いかける。

いつもの彼なら言わないことでも、今なら言ってくれそうな気がしたからだ。

姿勢好のことで彼が言及することは過去にあまり無かった。

けれども逆に聞き返された本人は無意識の行動だったんでぐつと詰まる。

一瞬目視線が泳ぐ。

そして先ほど重なった記憶がすぐに思い返された。

春風とともに揺れる艶やかな着物。

桜の下で鞠をつく少女。

その少女がしていた髪型は――：

「二つくくり、とか」

「二つくくり？ ツインテールか？」

なんでそれなんや、と伺うように目を向けると「何となくや！」と何故か怒ったように平次は顔をそらした。

聞かれても困るのだ。

ただ、彼女の揺れる髪を見ていたらあの光景が思い出されたのだから。

そしていつの間にか自分でも知らないうちに聞いてしまっただけなのだから。

自分でもらしくないと思うあやふやな言動に戸惑う。

眉を顰めてこっちを見てくる和葉に、らしくない自分が恥かしくな

って

「もうええわ」と言おうとしたその時。

「そんなら、来週ツインテールしてくるわ!」

「え?」

「来週の日曜、おばちゃんの知り合いの家のお茶会ウチら行くやろ? その時着物着るさかいたまには髪型も変えてみるわ」

どんな感じになるやろねー、と彼女は笑いかけた。

そんな笑顔に平次は目を大きく開いた後、平然を装って「さよか」とだけ返す。

リクエストに応えたにも関わらず素っ気無い返事だったが、和葉は怒らなかった。

なぜなら彼の顔はどこか嬉しそうだったからだ。

「もしかして平次ってツインが好きやったんやろか」と

少々外れたことを考えながら、来週の着物と髪飾りについてデザインを練った。

そして件の日曜日の茶会において。

和葉は予告どおり千代紙のような和風の模様が描かれたリボンで髪を二つに縛ってきた。

着物は紅い牡丹が踊った鮮やかな色合い。
尊いものを見るかのように平次は目を細める。

「やっぱりや」

その言葉の意味を和葉が知るのはもう少し先のことであった。

3、花の下の君（後書き）

「迷宮の十字路」参照

4、Tactics

「クールビズ推進中」と書かれた張り紙がクーラーの冷風で飛ばされそうな昼間。

警視庁捜査一課内は昼食を取るために戻ってきた刑事もいて割かしにぎやかになっている。

溜まっていた報告書を片付けていた白鳥は、ひと段落ついたところでぐっと両手を伸ばした。

肩のところどころがぽきぽき鳴ったような気がする。

力を抜くようにため息をつきつつ、手を伸ばした時

視界に入った、同じく後ろ斜め向かいのデスクで書類を整理する佐藤をちらりと見た。

ときばきとファイルにプリントを分けていく彼女の手に光るモノがきらり。

それは指輪。

しかもよりによって左手薬指に。

おまじないでつけているらしいことは本人や宮本婦警から聞いている。

シルバーにターコイズの入った指輪で魔除けになるという。

それ以外の意味、つまり左手薬指の恐らく常識的である意味を知らずにつけているのだ。

最初それを聞いた時はあまりの無垢さに驚いたものだったが、佐藤とはそういう女性だったと思い返したものだ。

——まあ、そこが良い所なんですけどね

もう少しくらいこっち方面に関しては聡いほうがこちらとしても気が楽かも

しれないとも思うが。

人知れず苦笑して、再び自分もデスクに向かおうと体の向きを変える瞬間、

その指輪に違和感を覚えてぴたっと止まった。

そう、ターコイズの入ったシルバーの指輪……だと「思った」指輪にだ。

——若干前の指輪と違うー！？

衝撃の発見に思わず気付かれることも構わないくらいそれを凝視した。

確かにターコイズは入っている。

が、以前とは違いそれが五角形の小さな宝石になっている。

彼女があんな短期間で装飾品を自ら変えるような性格でないことは知っているつもりだ。

なら、誰かが渡したとしか考えられない。

そしてその「誰か」とは腹が立ちつつも一人しかいないわけで。

「どうしたの、白鳥君。そんな怖い顔してこっち向きっぱなしで」

思考が現実から遠のいていた自分に、怖い顔にさせた本人がやはり気付いてしまって回転椅子をくるりとこちらに正面向けた。書類は片付いたらしい。

「いや……その指輪が最初していたのと違うなと思ひまして」

若干引きつりつつも冷静を保った振りをして原因を言う。
嗚呼答えを聞くのが怖い。

「これ？高木君に貰ったのよ。つけるならコレにしてくださいって
言われてね」

やっぱり。

心の中で「or^{がっかり}z」のポーズをとる。

やはりあの男はのほほんしているようでこういうところには抜け目が無い。

天然タラシ疑惑男め。

だがここで大人しく

「ああ、そうなんですか。よくお似合いですよ」なんて言う
白鳥任三郎ではない。

「じゃあせつかくですし私の家にある魔除けの指輪もしてみませんか？

私の家では誰もつけていないので、使ってもらえる方に
差し上げたいと思ってたんですよ」

家にあるなんてウソである。

今からダッシュで宝石店にいくつもりだ。

「誰かに使ってもらわないともったいない」という名目であれば

指輪の意味を知らない彼女も承諾すると思ったのだが、それは次の返事でもろくも崩れ去る。

「あら、使えないなんて言わずに白鳥君つけてみたら？
仕事上験担ぎにいいかもしれないじゃない。私はこの指輪だけで十分過ぎるわ」

佐藤はそう答え、穏やかな顔で視線を手元にやる。
反対に白鳥はその答えに少しだけ眉を顰めてしまう。

「……その高木君の指輪で、十分すぎるんですか？」

その問いかけに彼女が何とも捉えにくい笑みを浮かべる。

「ええ。それにこの指につけるなら、高木君の指輪がいいわ」

「え」

それってもしかして。

脳裏にある考えが思い浮かぶ。

いや、だがしかしそれなら彼女は「それ」を承知で薬指にはめて――
……

「3丁目の聞き取り終わりましたー！」

突然自分と佐藤の間に一際元気な声が通り抜けた。

ぱつと横を向けばそこには指輪をあげた張本人が報告書とコンビニ弁当を

持って側まで来ていて。

「お疲れ様。じゃあちょつと報告書見せてくれる？」

「はい、どうぞ」

既に自分との会話は終わったつもりらしく佐藤が高木へ労をねぎらう。

その視線は仕事仲間というには少し違う優しさが入り混じっていた。

「それ」を承知の上で黙ってあげた彼と同じく黙ってはめた彼女。2人を繋ぐ指輪がまたきらりと光る。

——いや、色んなもの籠り過ぎでしょう。それ……

その光に2人の様々な思惑を感じ取って、知らず知らず冷や汗が出た。

4、Tactics（後書き）

「tactics」駆け引き」

たまにはこんな高佐もありかなと。

5、凍える飾り

とある財閥の長が執筆した本の出版記念パーティー。

ホテルの会場を借りた比較的小さな規模だったが、出席者達は上流の中でも更に上を極めた者達ばかりである。

窓から見える夜景以上の煌びやかさが会場を彩る。

――何度見ても、あまり綺麗だとは思えないが……

しかしそんな無数の光を端から眺め、内心呟く少年の姿が会場の片隅に一つ。

立食で皆々が決まりきったような社交を繰り返している中、白馬探は一人気だるく壁に背をもたれさせた。

周囲には気付かれない程度にため息をついたが、目の前に橙色の世界が突然広がった。

「一杯どう？アルコールじゃなくてオレンジジュースだけど」

そう言うてにつこりと笑いかけたのは同い年くらいの茶髪の少女。朱色のイブニングドレスを着こなし、右手と左手にグラスを一個ずつ持っていた。

右手のグラスは白馬の目の前に差し出されている。

突然の声かけに白馬は一瞬目を丸くしたが、すぐにいつもの爽やかな笑みを浮かべて手を伸ばす。

「ありがとうございます。失礼ですが貴女は？」

「私？ 私は鈴木園子よ。このパーティー、若い子いないからつまらなくって。そして今やっと同じ年くらいの貴方を見つけたからナンパしちゃった」

舌を出して茶目っ気たっぷりに彼女は笑う。

そして自然と彼の左隣に立ち、同じく壁に背をもたれさせた。対する白馬は「鈴木」という名に思い当たる節があった。

あの鈴木財閥のお嬢様か、と。

名家の割には案外くだけた話し方をする女性だと感じる。

「遅れましたが、僕は白馬探と申します。以後お見知りおきを」

「へー、あの白馬さんのところの人だったのね。こちらこそよろしく。じゃ、お互い知り合った日を記念して……」

ずっと園子がグラスを傾ける。

意図をすぐさま理解した白馬が、慣れた手つきでグラスを園子の近づけた。

ちん、と乾いた静かな音が鳴った。

二人ともそのままオレンジ色のジュースに口をつける。

一口飲んだだけですぐに離れたのは、マナーの他に互いにもっと話してみたいと言う気持ちがあったからだろう。

「今日平日だけど、白馬君学校は？」

「僕はイギリスの学校に行ってるんですよ。今日は帰国したついでにきたので、平日とかは関係ないですね。貴女こそ、明日も学校あるんじゃないですか」

「明日は学校の創立記念日なのよ」

「ああ、なるほど」

今日も明日も平日のため、このパーティーに学生は園子と白馬と、他に数名いるかいかなのである。

「なんか、白馬君つまらなさそうだったわよね。こんなパーティーもう飽きた？」

白馬家の人間であれば何回も行ってるだろうから、そろそろ飽きてくるのではと園子は問う。

普段なら、白馬もそこで肯定して次の話題に移るところだ。

少し苦味の入った笑いを見せて、軽く頷いて。

だが今日は何故か流せなかった。

先ほど名乗った時、「白馬」の名を出しても媚びた目や好奇心の籠った接し方をせず、あっさりとグラスを交わした園子になら、本当のことを言っても良いかもしれないと思ったのだ。

「飽きたといえますか……重い、ですね」

「重い？」

風邪をこじらせた母に代わって出席したものの、家同士が知り合いになる人間に挨拶すると「ああ、あの白馬警視總監の……」としか返って来ない。

どこへ行っても何をして父の名前が、家の名前が、付きまとう。高校生にもなり自立心が芽生えてくると、いい加減それも荷物になる。

重い重い荷物だ。

肩にどしりと乗った目に見えない塊にうんざりして、先ほど壁にもたれていたのだ。

「貴女も感じることは無いのですか？ 自分の家が、重いと」

鈴木財閥のご息女なら、自分と同じかそれ以上の荷物があるはずだ。

そう白馬は思い、聞き返す。
が、

「無いわね」

はつきりと、あっけらかんと園子は言い切った。

「よく人から同じようなこと聞かれるけど、私あまりそういうの感じないのよ」

もう一口、ジュースを口に運ぶ。

中身が減るごとに氷が中で回る。

半分ほど飲み干してから、やっと園子はグラスを降ろした。

次に右上にある長身の白馬を少し見上げる。

「あのね白馬君。”白馬家”とか”鈴木家”なんて、私達にとってはただのアクセサリーに過ぎないわ。一生取れない飾りかもしれないけど、私は私よ。鈴木園子っていう人間よ」

そこまで言って、彼女はグラスの中の氷を口に入れてがりつと噛んだ。

お嬢様らしくない行動。

でもそれはわざとやっているようにも見えた。

お嬢様でもこんなことは出来るのだと。

しかし、白馬はそんな彼女が逆に気高く思えた。

大きな宝石の入った飾りを付けこなす、貴人にだ。

同時に自分の考えていることがとてもバカらしく感じてくる。

「アクセサリーなら軽そうですね」

「そうねえ。でも、どうせつけるなら綺麗なほうが良いと思うわ」

「それはそうだ」

白馬はシャンデリアの輝く天井を見上げて少しだけ笑った。

そして彼女と同じようにジュースを飲み干し、氷を口の中に入れる。

彼にしては相当珍しい行動だったが、園子は面白そうにそれを眺めた。

背の高さと会話の端々から垣間見えるある種の誇り高さが、海に向こう側にいる「あの人」に似ているようだったからだ。

そんな園子の事情などは当然知らない白馬は、氷の塊を思い切り砕いてみる。

心地よい振動が、口の中に広がった。

6、迎える日

水無が眠っている病室の隣室に構えたFBIの控え室では、元から備品として置いてあった小さなテレビからニュースが流れていた。夏休みシーズンの目玉行楽地を紹介しているアナウンサーが画面の中にいる。

本来なら、隣の病室にいる人気女子アナもこういったことを今頃しているはずだったのかもしれない。

見事な二足のわらじね、とため息をついてパイプ椅子に座ったジョディはその箱を眺めた。

自分も以前はそれに似たことをしていたのだが、彼女ほど完璧には出来無かったと振り返る。

自販機で買ったコーヒーを飲みながらそのまま見つめていると、アナウンサーが特集の締めにした単語が気になった。

その単語自体は聞いたことあるが、何となく把握できない言葉だ。かばんに入れてある電子辞書でも調べてみようかと立ち上がる。ちょうどそのとき、扉が開いた。

中に入ってきたのは赤井。

外での調査から帰ってきたらしい。

渡りに船とばかりに、早速ジョディは気になった単語について目の前の日本人に問いかける。

「ねえ、秀。お盆って何なの？」

「……盆だと？」

開口一番、聞かれた言葉に赤井は若干眉を顰めた。

「さっきテレビで、今年のお盆は国内旅行が増えるって言ったのよ。お盆は日本人がレジャーするために作られたお休みなのかしら」

彼女がという点で誤解をしているかがわかった彼は、自分が久しぶりに日本にいることを実感する。

アメリカにいる時にはまず聞かない質問だ。

「……盆に旅行することが増えたのは後付けだろう。本来の目的は、8月15日に帰ってくると

言われている死者の霊を迎えることだ」

「死んだ人が帰ってくる？」

「まあ、仏教の考えに近いからお前にはわかりづらいことかもしれないがな」

「ハロウィンみたいなものかしら」

「どうだろうな。死者が来るという点で言えば共通点もあるが」

「へーえ……」

ハロウィンも英語圏では死者の霊や魔女・精霊が出てくるとされている行事だ。

死者たちへの対処が盆とだいぶ違うが、ジョディがそれと重ね合わせたのは致し方ない。

それで彼女が納得したと判断した赤井は、背中を見せて同じように空いているパイプ椅子に座った。

調査結果をまとめるべくパソコンを立ち上げる。

彼との会話が不意に終わるのはいつものことだ。

電子起動音が静かに響く隣で、ジョディも腰を下ろし側にあった資料を手にとった。

ぱらぱらと枚数を確認していくが数分後、ふと、その手が止まる。何かを思いついたように、顔を上げる。

そして、起動音も収まりキーボードに指を置こうとしていた赤井のほうを向いた。

「ねえ」

「……なんだ」

今日はやけに話しかけられるなど思ったが、画面を見たまま彼は大人しく返事をする。

「私の父も、帰ってくるのかしら」

ぴたり、と彼の指が止まった。

彼女は真顔だ。

冗談抜きで、本気で思ったのだろう。

黒の女に殺された父の霊が、自分のところへ来てくれるかもしれないと。

しかし、すぐに被りを振った。

「でもやっぱり宗教が違ったら無理なのかしら。それにここ日本だし」

「……いや」

赤井が画面に向いていた顔をジョーディのほうへ移す。

「日本はアメリカほど宗教にこだわりはない。……クリスマスの数日後に、正月を盛大にやるような国だしな。お前が帰ってくると思ったら、お前の父は帰ってくることになるかもしれない」

「そんなものなの？」

「そんなものだ」

厳密に考えれば、「そんなもの」でもないかもしれないが。それでも彼は言い切った。

彼女の父に対する思いは知っていたし、更に彼も帰ってきてほしい死者の霊があったからかもしれない。

まだ一周忌も向かえていない、大切な人の霊を。

一方彼女はそんな赤井の心境には気付いてるのかいないのか、少し考える素振りを見せた。

そして肩を竦ませ、日本人がよく欧米人の仕草として想像する「あきらめ」のポーズを取る。

「……やっぱり日本は私にとってまだまだ不思議な国だわ」

そうは言いつつも、どこか嬉しそうだ。

何度も聞いて悪かったわねと彼女は付けたし、そのまま再び資料に目を下ろす。

謝意には応じることなく、黙って赤井もパソコンに向き直る。

紙のめくられる乾いた音とキーの軽快な操作音だけが病室に、暫くの間続いていた。

そしてお盆の日。

コナンにでも詳しく聞いたのか、爪楊枝が刺され馬のような形をした胡瓜と、同じく牛のような形になった茄子がちょこんと窓際に置かれていたらしい。

7、続・富豪探偵

ここはアフリカか。

快盗キッドが「ここ」に来てまず思ったのがそれだ。

某漫才コンビが鋭くツッコむあんな力強い思いではない。

例えるなら、某「すごいよマ○ルさん！」に出てくるような背景
真っ白で登場人物が目を細めて脱力している場面だ。

限られた人しかわからなさそうな表現だが、そういうことなのである。

「おいおいおい……」

白いマントを棚引かせ、闇夜の電信柱に降り立った彼は顔を引き
つらせた。

ターゲットは、遙か昔フランスの貴族が道楽で作ったとされる巨
大なネックレス。

優に数メートルはあるであろう輪の中心には、ビッグジュエルが
はめ込まれてある。

勿論それは人間が身につけるものではなく、ネックレスに見立て
たオブリジェだ。

それが今日の前に広がっているライトアップされた豪邸の中にあ
る、のだが。

降り立った瞬間突きつけられた非現実的な現実には、キッドは冷や
汗を流した。

「……キリンって確か、案外強いんだっ……よなあ」

そう、豪邸と同じくらいの大きさを持つ庭のど真ん中にキリンがのっそりのっそり優雅に歩いていたのだ。

しかも三頭。

そのうちの一頭の首には、お目当てのビッグジュエルが入った首飾りが飾られてあった。

動く巨大キリンの首から如何にして盗るのかも難題だが、それ以上はどうやって飾ったのかも非常に疑問だ。

「ぜってーコレ、白馬のヤロウの差し金だな」

キッドは確信する。

なぜならこの豪邸の主は白馬家の親戚だからだ。

あの白馬探のことだから、警察の力を使いまくるか、ホームズよろしく一人で待ち構えるかどちらかだろうと思っていた。

少なくとも、下見に来たときは警察が近辺を警護していた。

だが、彼は第三の方法を取ったのだ。

夜でもライトで煌々と明るい大庭園で、ゆっくり歩くキリンの首にかかるビッグジュエル。

白馬からの無言のメッセージがそこにあるような気がした。

取れるものなら取ってみろと。

あの子憎たらしい、気障で嫌味な笑みを湛えたシャーロキアンが頭に浮かんだ。

「あー腹立つ！　ぜってーどうにかして取ってやるからなあー！！」

キッドが珍しくポーカークフェイスを崩していたその頃。
崩させた張本人の白馬探は、豪邸の中でゆったりと紅茶を飲んでいた。

勿論ホームズコスプレはばっちりしてある。

相棒の鷹・ワトソンも籠の中で大人しく待機中だ。

彼は庭を臨むリビングでソファに座り、首の長い動物を眺めた。
警察もいない。

ここで警護しているのは事実上彼だけだった。

「ふふふ……僕の親戚をターゲットにしたことが運の尽きですよ。
快盗キッド。おかげで僕は好きなように行動できる」

ビッグジュエルが大きな首飾りだと知った白馬が、今の状況にしようと思いついたのは予告状が届いた一週間前。

より大きなキリンを求め、わざわざアフリカまで行って船で本物を運んできたのだ。

つまり野生。手懐けられるはずがなかった。

だが、アフリカの大地でちょっとおかしいくらい堂々とキリンに向かって「君達の力を貸してくれ！」という白馬に、相手も興味を示してしまったらしい。

その結果、素直に三頭がついてきてくれたというわけである。
障壁になりそうな法律やら何やらも色んな権力を使ってどうにかしたようだ。

「さあ、どうしますかキッド。僕はこの新しい友人（注・麒麟）に全てを託しました。この苦境を乗り越えられるというのなら、是非僕に見せてくれたまえ！」

部屋の中にあるオーディオデッキから勝手にクラシックを流して、白馬が自分の状況に酔う。

ちよっといっちゃった親戚の息子を目にしておろおろしている家の主など、どこ吹く風だ。

アフリカー日本間の船の運賃、膨大なエサ代、大庭園の塀を更に強固なものにする改修費。

気が遠くなるような費用をかけたが、当の白馬はキッドへの挑戦の一つとしか考えて無いようだ。

「さすが坊ちやま。相変わらず素晴らしいご名案でございますわ」

側に控えるばあやの称賛が、BGMと共に白馬をより酔わせる結果となっていた。

一方、キッドは電柱で高機能な回転を誇る頭をフル稼働し様々な対策をめぐらしている。

「えーと、他の二頭も邪魔だし、麻酔も普通のやつは効かないし、手品で驚かせても暴れたら余計にやばいし、普通に近づいてもかなりキック力はあるらしいし……ん？ でもそんな麒麟の首にかかっているってことは、誰か心許せる人がかけたってことだよな」

そして数十分後。

本物と見間違えるかのような白馬に扮したキッドが庭に堂々とやってきて、キリンに「僕にその飾りを取らせておくれ」と言うことになる。

「そいつは偽者だよジョセフィーヌ!」といつの間にか名前までつけて慌てて庭に出てきた本人とキッドが対面して、互いに互いを本物だと主張する奇妙な場面。

それを目を丸くして見下ろすキリンの胸中を、窺い知るものはいなかった。

7、続・富豪探偵（後書き）

「春一番」でも書いた富豪探偵の第二弾です。

色々強引ですけど目つぶってください。（苦笑）

ノリはコナンと言うよりまじ快っぱい。

前話の白馬と今回の彼はもはや別人か。（ファンの方ごめんなさい

でもこんな彼が愛おしいです↑告白）

ちなみに、日本の法律だとキリンは飼えるそうですよ。（笑）

8、私のお姉さん

突然ですが、私にはとっても強いお兄ちゃんが居ます。

誰にも負けない、強い人だけど、真面目で優しい人でもあります。私は大好きです。

そんなお兄ちゃんに、最近恋人が出来ました――……

話を聞いたのは数ヶ月前。

私は最初びっくりしました。

失礼だけど、「あのお兄ちゃんが？」という気持ちです。

だってお兄ちゃんって空手にしか興味無さそうだったんだもの。

朴訥なお兄ちゃんのハートを奪ったのは、色白で髪の毛を茶髪に染めた今風の女子高生っぽいお姉さん。

でもどこか品があるように感じます。

このお姉さんには一回だけ私も会った事があります。

伊豆で両親が営んでる民宿に、お姉さんとそのお友達が泊まりにきた時です。

あの時、お姉さんは悪い人に襲われてお兄ちゃんが助けたらしいです。

私はその様子を聞いたただけだったけど、とても素敵だなと思いました。

その後二人は恋人同士になって、海外に武者修行に行ってる間も連絡し合ったり仲睦まじく付き合ってるようです。

そして今日。

久しぶりに帰国したお兄ちゃんが、なんとその人を連れて実家に

帰ってきたのです。

私は「もしかして婚約のご挨拶とか？」と思ったけど、そこまで進んだことをするために帰ってきたのではなく、ただ単に伊豆に遊びに来たらしいです。

それでも私の家、つまりお兄ちゃんの家でもあるここに来た時は、菓子折りを差し出して丁寧な挨拶を両親にしていました。

私の両親のほうが逆に緊張してしまってあたふたするくらい、お姉さんは元気にはきはきと話します。

私はまだあまりわからないけど、東京のすごく大きな財閥のお嬢様だそうで、そのおかげかもしれません。

挨拶を終えてからは、お兄ちゃんと一緒に海に行きました。

私はお母さんと一緒に夕飯のご馳走作りです。

そして数時間後、帰ってきたお兄ちゃん達と家族で海の幸をふんだんに使った料理を食べました。

お姉さんはおいしいおいしいと何度も言ってぱくぱくと食べてくれました。

お嬢様でも一杯食べるんだと、意外に思ったけど嬉しかったです。

夕飯を食べた後はお兄ちゃんだけ「体が鈍るから」とランニングに行ってしまうました。

どこまでも空手一筋な人です。

残されたお姉さんは私に話しかけてきました。

「中学何年生？」とか「お兄さんは優しい？」とか「伊豆に住んでるなんて羨ましい」とか。

私は最初ちょっと緊張したけど、答えていくうちに段々ほぐれていきました。

お姉さんはとても気さくな人だとわかったからです。

質問に答えるだけじゃなくて、私も色々聞くことにしました。

東京の有名なお菓子とか、渋谷や銀座にある服のお店のこととか。

東京の高校に在学しているのに、流行に全く興味の無いためお兄ちゃんが私に教えることが出来ないようなことをたくさん聞きました。

やっぱり都会には懂れてしまいます。

ブランドで身を包むとかそういう夢があるわけじゃないけれど、流行の最先端を見てみたい好奇心は否定できません。

そんな私の気持ちを察したのか、お姉さんは

「じゃあ、今度東京に遊びに来る？ 私が色々案内してあげるわよ」

と誘ってくれました。

家に泊まりに来て良いとまで言ってもらえました。

私は迷わず「はい！」と返事をしました。

それから、お兄ちゃんが帰って来るまでその東京観光の予定を二人で色々組み立てました。

あと、お姉さんが持ってきていたブランド物のボストンバッグから更にブランドのポーチが出てきたりしてそれを見せてもらったり。でもそれは何故か嫌味には見えなくて、不思議でした。

話を弾ませていると、お兄ちゃんが帰ってきました。

ちゃぶ台に肘を突いてケータイをかざし、赤外線でメルアド交換をしている私達を見て目を丸くします。

「……何だか、とても仲良くなったようですね」

「ええ！ 夏美ちゃんって真さんと似てとっても可愛いんだもの。今度東京に遊びに来ないって誘っちゃった」

「東京にですか？」

「うん！ 園子お姉さんが案内してくれるんだって！」

「ご迷惑ではないですか？」

「全然よ。私妹欲しかったし、大歓迎！ だから今こうやってメルアド交換して今後の予定を立てているの」

「……そうですか」

お兄ちゃんはそのまま「ご迷惑にならないようにするんだよ」と私に言って、すぐに自室に行ってしまいました。

一緒にお茶でも、と思ってたお姉さんは少し怪訝そうな顔を見せます。

いつも一緒にいられないので、その分二人でいられる時間を大切にしているのかもしれない。

だから、そそくさと引っ込んでしまったことに不安があったのでしよう。

「何か真さん機嫌悪くなかった？ 私何かしたかな……」

「いいえ、大丈夫ですよ。兄は単にいじけてるだけですから」

「いじける？ 真さんが？」

「はい。兄はああ見えて案外子供っぽいところあるんです」

「?」

疑問符を頭にいっぱいつけて首をかしげるお姉さんに、私はくすりと笑いました。

私には、何故お兄ちゃんが複雑そうな顔ですぐ引込んだかが直感的にわかります。

きっと、恋人の隣を取られて拗ねたのです。

ランニングから帰ったら、一緒にまた散歩でもしようとか考えていたのかもしれませんが。

でもお姉さんは現在私と仲良く観光プランを考え中で。

そこに割って入るほどお兄ちゃんはいわゆるKYではないです。

かと言って割り切れるほど大人でもなくて。

お兄ちゃんは昔から、願望と我慢の葛藤になると黙ってしまう癖がありました。

先ほどの複雑な顔が良い例です。

せっかくの休日なのに悪いことしたかなと罪悪感がちよつと出てきます。

でも私ももう少しお姉さんと遊びたいから、折衷案を出すことにしました。

「この予定が組み終わったら、花火をしませんか？ 多分、兄もそこで誘えばいつもどおりに戻ると思います」

「え、そうなの？ やるやる！」

数十分後、近くの海岸に私達はいました。

満天の星空の元、光の飛沫を上げる花火を手で三人で笑い合います。

私の予想通り、お兄ちゃんの機嫌も良くなっていました。

ぱっと見はいつもの朴訥な表情ですが、どこか雰囲気柔らかいのです。

お姉さんもそれがわかってて内心安堵しているようでした。

ネズミ花火が足元でくるくる回り焦る二人は、それでも幸せそうです。

そんな二人を見て、私も嬉しくなりました。

その嬉しさを満喫するかのよう一杯空気を吸い込んで、夜空を見上げます。

一瞬、視界を横切ったのは一筋の流れ星。

即座に願うは唯一つ。

”早くお姉さんが本当のお姉さんになって、皆でずっと笑い合えますように”

東京観光もすごく楽しみだけど、そっちのほうがもっと楽しみなのです。

——私にはとっても強いお兄ちゃんが居ます。

誰にも負けない、強い人だけど、真面目で優しい人でもあります。

私は大好きです。

そんなお兄ちゃんに、最近恋人が出来ました。

その恋人は、私にとってもすごく素敵なお姉さんでもありました。

8、私のお姉さん（後書き）

珍しくオリキャラで。52巻で存在だけ確認された京極さんの妹です。

名前は苗字の関連も考えて「夏美」。

妹さんと園子が仲良くなったら面白そうだなと。

9、ありえない死

手遅れだ。

駆けつけて見た瞬間そう思った。

首が直角に折れていて、頭蓋骨も砕けてるのではないだろうか。
青空に不似合いな、赤く滲む地面とそこに大の字に倒れている少女。

目が引ん剥いているが、その顔に見覚えがある。確か三年の先輩だ。

屈んでいた新一は黙って立ち上がり、上を見上げた。

この真上にある校舎の屋上のフェンスをよじ登り、彼女はたった今飛び降りたのだ。

それを、校庭で同級生とサッカーをしていた彼が目撃した。

彼は校庭にいる生徒達に近づくなど制止し、救急車と警察を頼んでからすぐに駆けつけたが、彼女の息の根は止まっていたようだ。

救命処置も出来ない有様にため息をついて、後ろを振り向く。

視界に入るのは不安そうに彼を見つめる同級生達と、慌ててやってきた教師達の姿。

絶望的な顔で教師の一人が「自殺か」と問いかける。

新一は「多分」とだけ答えた。

この状況を見る限り、きっと他殺は無い。

いつもなら明らかな自殺でも他殺の疑いを持って調べる新一だが、今回はそんな風には思えなかった。

根拠は、この無しか映さない遺体の目。

何の希望も無く、何の暖かみも無いまま、死を拒否しているのに受け入れてしまったその目。

彼にしては珍しく、それは根拠とは言えない根拠だった。

死ぬ時彼女はどんなことを考えていたのだろう。新一は思う。

飛び降りる瞬間の彼女は、遠目ながら絶望感に溢れた空気を纏っていたような気がする。

いじめ、

受験、

レイプ、

恋愛、

家庭環境、

精神障害、 e t c――

自殺する原因を思いつくまま頭の中に並べてみる。

だが、どれもいまいちぴんと来なかった。

それ以前に新一は、人が自ら死ぬ原因が理解できない人種だった
が。

彼自身それは自覚している。

「直子！？ 直子ーっ！！！！」

突然野次馬の輪の向こうから、自殺した少女の名を叫ぶ声がした。
声のするほうに目を遣ると、涙ながらに女子生徒が人と人の間を
押し退けて遺体に近づこうとしていた。

慌てて教師がそれを抑える。

抑えたのは、探偵の新一に現場を荒らしてはいけないと言われた
からだろう。

尤も、面倒なことをこれ以上起こしたくないという気持ちも多分
にあっただろうが。

それでも女子生徒は制止する教師の腕の中でもがきながら、「直
子」という名を呼び続けた。

何度も、何度も。

新一はそれを無表情に少しだけ見つめたが、次に再び遺体の前にしゃがみこんだ。

少女の見開いていた目の前に自分の手をかざし、ずっと瞼を閉じさせる。

「遺体に触らなかつたら、いいですよ」

そして顔だけ振り返り、女子生徒にそう言った。

女子生徒は一瞬びたりとその叫びを止めて新一を見る。

だがその直後、再び慟哭を校庭に響き渡らせて遺体に駆け寄った。触れないことが条件であったが、遺体を抱き寄せんばかりの勢いに新一が後ろから女子生徒の両肩を掴んで留める。

この様子からして、彼女は死んだ少女の親友だったのではないかと彼は予想する。

こんなに思ってくれる人がいるのに、何故死んだのだ。

あんな目だけは少女も親友に見せたくないだろうと思い、いけないことだとはわかっていながらも瞼は閉じさせた。

しかし、少女が死んだ理由だけは何度考えてもわからない。

生きる以上の理由が、死にあるとはどうやっても思えない。

それ以外の言葉を忘れたかのように、名前を叫ぶ親友の肩から抑える自分の手に伝わる震えが、より一層新一の不可解さを増幅させる。

わからない。

わからない。

理解不能な現場の上から、昼休みの終了を告げるチャイムがいつもどおりに鳴っていた。

10、のぞまれた死（前書き）

前話「ありえない死」の対となるこの話で「パッション・サマー」は終了させていただきます。

タイトルに反して秋までゆっくりと書かせてもらいましたが、辛抱強く読んでくださった読者様方にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

10、のぞまれた死

もうあかなな。

平次は駆けつけて見た瞬間でわかる。即死だと。

和葉の合気道の試合を見に、バイクで行く途中だったのだが、歩道橋の下を通り過ぎようとする時に真上から人が降って来た。

幸い自分には当たらなかったが、飛び降りた男は頭を強く打って死んだようだ。

慌ててバイクを止めてそれを確認した後、平次は歩道橋の階段を走って上まで行く。

誰も居ない。あるのは古びた革靴のみ。

ここで靴を脱いで飛び降り自殺したのだろうと彼は判断した。

その後遺体の所まで戻り、馴れた手つきで携帯で警察に連絡をする。

そして後ろからやってくる車を手で制して、「人が前で死んでる」とだけ伝え止まるように言う。ついでにまた後ろから車が来たら停止させて欲しいと頼む。

教えられた車の運転手はびっくりした様子だったが、目の前の少年が有名な高校生探偵だということに気付いて大人しく従った。

遺体の第一発見者としてするべきことは大方した平次は、次にしやがんで遺体の確認を再度する。

年齢は五十歳代か。頭を打ったせいではない苦渋の皺が刻まれているような気がした。

こんな晴天の日にもつたいないことをするものだ、とため息をついて注意深く観察するとポケットに目が留まる。

白い紙が、入っている。ドライブ用の手袋をつけて、慎重にそれを抜き取った。

四つ折りにされた便箋をぱらりと開けた。

細く歪んだ字で死んだ理由について短く書いてある。不安定な筆記なのは、死を覚悟したゆえか。

『私の保険金で家族が生き延びてくれれば』

この一文が、飛び降りた動機を物語っていた。
借金を苦にした自殺。

よくある理由だが、だからこそとても大きな問題でもある。

——自殺して解決出来る問題ってどうやろうな。生き延びたほうが金もらえる制度があったらええのに。

——…皆そう思うけど、出来ん理由が一杯あるんや。

——わかつとる。ただ言うてみただけや。

以前この目の前の自殺と同じようなニュースを見てた時の、父との会話を思い出す。

理不尽な世の中だと思ったのと同時に、理不尽だからこそこの世は成り立っているのだらうとも感じたのを覚えている。

この男の死で救われた家族はきっと泣くだろう。

文字通り、死ぬ気で守りたいほど愛されていた家族だ。とても悲しむに違いない。

借金が無くなるのと引き換えに、永遠の哀を手に入れてしまったのだから。

それでもこの自殺は正しかったのか。

平次は考える。

命には限りがあるからがんばれる、と言ったのは自分自身。

では、その限りを本人で決めてしまうことは良いのかどうか。

自分の倍以上生きている母は「自殺も立派な殺人」だと断罪していたが。

母の言うとおり、自殺はいけないことだ。良いか悪いかで表すなら、悪いことだ。それはわかる。だが――

「理解は出来る、なあ……」

頭によぎった考えがそのまま口に出た。

理解、と言うには少し語弊があるかもしれないが、確かにそれに近いものが平次にはあった。

元々彼は、犯罪者の感情に一種の理解を示す人間ではある。

犯罪を歓迎するというわけでは勿論ない。

ただ、罪を犯した者達の、罪を犯すまでに至った動機に「人が人であるが故の、避けられない感情」が影響しているのだと感じているのだ。

今回も、家族を救いたいという彼の人間らしい欲望が望んだ自殺だったのだと。

その欲望の存在を、平次は理解出来てしまう。

「き、君。携帯鳴ったけどええんか？」

「え？」

頭が現実からどこか遠くへ行っていた彼に、先ほど車を止めた男が恐る恐るやってきて言った。

ジャケットのポケットから携帯を取り出すと、確かにメール着信のランプが点滅している。

考え込んで気付かなかったらしい。

おおきにと札を言って待ち受け画面を開けると、「工藤」の二文字。

そういえばこの工藤も数週間前、学校で飛び降り自殺を目撃したと聞いた。

自分に負けず劣らずの死神ぶりを発揮する工藤は、その時どう思っただろう。

死んだ理由は流石に違うだろうが、自殺したことには変わらない。考え込んだついでに、そんなことにも思いを馳せる。

今回に限らず、今まで色んな事件を共有して、共に真相を暴いてきた彼。

謎を解き明かすという、同じ行為を飽きもせず続けてきた彼。

あまりにも真っ直ぐに、正義を信じてきた彼。

その彼に、「罪を犯す欲望の存在」を言えば。

彼は肯定するか否定するか。

いや、それとも。

「……多分、わからんやろうなあ。工藤には」

遺体にさんさんと降り注ぐ陽光の先を見上げて、平次は呟いた。

その存在を理解する自分は人間らしいかもしれないし、らしくないかもしれない。だが少なくとも、わからないであろう工藤のほうかはるかにマシな人間だと思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2567c/>

パッション・サマー

2010年10月14日16時35分発行